2019年（平成31年）
4月号（No. 887）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

今でも胸がときめく春の小屋開け
道直しは小屋番の生きがいであり楽しみ

間もなく10連休となるGWが始まる。アルプスの山小屋も小屋開けに忙しいが、山小屋の仕事は実に多岐にわたる。登山者の受け入れに始まりコース案内や助言、小屋と登山道の整備・補修、遭難救助、荷上げなど、マルチな働きを要求される。そんな山小屋稼業の一端を、〝涸沢のボス〟山口孝会員に語っていただいた。

涸沢ヒュッテ　山口　孝

鋸からチェーンソーへ

私が涸沢へ小屋番として入山したのは昭和47（1972）年、札幌オリンピックの年でした。早や48年目の春を迎えることになります。当時は釜トンネルから歩き出し、1泊目は上高地の営林署保養所に厄介になり、2泊目は徳沢園の冬期小屋でお世話になり、3日目は朝4時に出発し、横尾～本谷～涸沢を目指しました。

8人ほどの男衆で当座の食糧を背負い、ワカンを着けて、雪の上を一人ずつ交代しながら進むのですが、40kgもの荷物なので、膝まで潜って悪戦苦闘です。本谷から涸沢までは雪崩で埋まった谷沿いに進み、午後3時ごろ、やっとの思いでヒュッテにたどり着きます。

もう体力を使い果たしているので、とりあえず2階の窓をこじ開けて中に入り込みますが、室内の壁は冷蔵庫のようにびっしりと霜が着いています。真っ暗な部屋でランプを灯し、ストーブを点けて簡単な夕食をとり、翌日からの雪との闘いに備えて、氷のように冷え切った布団に潜り込むのです。

そのころの除雪器具は、氷屋さんが使うアイスノコとスコップ、トタン板で作ったダンプのみで、後はすべて体力勝負でした。手作業だけの除雪は大変で、ヒュッテの玄関と売店だけを開けて連休をしのいだ年もありました。

朝7時から夕方6時まで、びっしりやりました。その後チェーンソーやスノーダンプが手に入り、とてもはかどるようになりました。新人はダンプ、中堅はスコップ、ベテランはチェーンソーと、それぞれ分担して作業しました。

ダンプで雪を運ぶ回数は100回、その走行距離は横尾往復分くらいで、自然に身軽さや足腰が鍛えられるのでした。刃渡り60㎝のチェーンソーで目一杯の大きさの雪を切っていくのですが、切り出す雪のブロック1個は50kgあり、

60kgもの荷を背負ってヒュッテへ登る（1987年7月）

目　次

今でも胸がときめく春の小屋開け
道直しは小屋番の生きがいであり楽しみ‥1
第4回全国「山の日」フォーラムに5000人
本会は「健康登山」「家族登山」をアピール‥4
雪崩事故防止のための講演会・
講習会を那須で開催……6
八甲田山岳スキー安全対策協議会が
発足「八甲田ルール」を制定……8
妙高山・火打山で入域料の社会実験を実施‥9
中ア南部・念丈岳～南越百山間の
登山道を再整備……10
追悼　西村政晃君を偲ぶ……11
活動報告　科学委員会……12
図書紹介……13
会務報告……15
新入会員……15
ルーム日誌……16
会員異動……16
INFORMATION……17
編集後記……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

前穂北尾根をバックに、10人力を発揮する除雪車

素早くダンプに倒すスコップの技は見事なものでした。休憩できるのは給油のときだけで、一日中、チェーンソーの音が涸沢カール中に鳴り響いていました。連日チェーンソーを使ったので、右手がしびれて眠れない夜が続きました。

小屋開け前は遠足前夜の気分

ヘリコプターで上高地から入山できるようになって、小屋開けもとても楽になりました。4台の除雪車は、何も文句を言わずにしっかり仕事をしてくれます。1台当たり10人分の作業をしてくれるので、最近は入山日も少しずらして、4月16日に入山、上高地開山祭の27日には営業できるようになりました。

稜線にある穂高岳山荘や北穂高小屋と違って、涸沢カールの底にあるだけに、ヒュッテの小屋開けの除雪作業は、世界一大変な山小屋ではないでしょうか。屋根上の積雪は平均3m以上。雪圧でつぶされないように室内には300本の支柱を入れます。とにかく屋根を出してから中の支柱を外し、客室を用意します。

10年ほど前の4月26日、やっと建てたばかりの外売店が表層雪崩で吹っ飛び、支配人が大ケガをしました。入山後、ヒュッテに雪崩が飛び込んできたのはびっくりで、この時期に雪崩は絶対来ないと信じていた、私の40年余の経験も一瞬にして吹っ飛びました。自然の驚異を肌で感じ、山の怖さを思い知らされた出来事でした。

そして、何よりも大切なのは水の確保で、毎年、これが心配の種でした。300mほど先の水源地はすっかり凍っており、入山してから連休過ぎまで水の出ないシーズンもありました。ヘリコプターで女衆だけ上高地へ風呂をもらいに行ったこともあります（高い風呂代でしたが……）。一番嬉しいのは、入山前の時期に雨が降ってくれることで、これで水源が確保できます。毎年、4月になると天気予報とにらめっこしています。

でも、小屋開けのシーズンを迎えると、まるで小学生が遠足に出かける前夜のように、胸がどきどきときめきます。穂高連峰の懐、純白の世界にいの一番に飛び込んで行けるのですから。そしてまた、明るく愉快なスタッフや山仲間たちと、半年ぶりに再会できるという楽しみがあるのですから……。

登山道は山小屋の生命線

日本のどの山もそうですが、穂高の山々も老齢期に入っており、各所で沢やルンゼ、稜線のガレ場などの土砂崩れが目立ってきました。平成10（1998）年の長野群発地震では、東鎌尾根の部分崩落や、北穂～涸沢岳間の稜線のカメ岩周辺の崩壊など、大きな被害がありました。そこで、市や村など役所関係が一体となり、山小屋の人たちとも連携して、民間ヘリを飛ばして登山道の修復を行ないました。このような大規模な登山道修復は、おそらく今までなかったのでは、と思われます。

昔から「登山道は山小屋の生命線である」と教えられ、小屋番の仕事のメインは道直しだ、と肝に銘じてやってきました。当時の山小屋の荷上げは、食糧をはじめすべての荷物をボッカで上げていました。夏の時期は1ヶ月間、毎日連続で横尾まで下りては担ぎ上げていましたから、その苦労と厳しさは今でも身に染みています。

毎日、横尾まで往復するわけですから、登山道で自分の足を置く

位置は、いつも必ず同じ場所になっていました。ですから、ちょっとの段差で足が上がらず死ぬ思いをした場所は、ボッカの合間に飛んで行って、こまめに道直ししてきました。

ヒュッテ直下の石畳の道（約300m）は、夏の終わりに2ヶ月以上かけて積み上げました。大きな石ほど永年持ちます。形は良いけど小さい石はすぐ崩れてしまうので、でかければでかいほど良い仕事になるということを、体で覚えました。

25年ほど前の9月の台風で、本谷～横尾間で50本ほどの倒木があり、その日ヒュッテに到着したお客さんから「まるでフィールド・アスレチックみたいで、超大変でした」との報告を受けました。早速、小屋番全員で3台のチェーンソーを持って、道に倒れた木を片付けに飛んで行きました。

架け替えられて、GWの登山者を待つ本谷橋

横尾に着いたのは午後3時でしたが、大勢の登山者が困惑しており、ほとんどレスキュー出動状態でした。そのときのお陰でチェーンソーを上手く使えるようになりましたが、道を開けるのに精一杯で、各役所に被害報告をできたのは夕方になってしまいました。

道直しはのちのちまで残る仕事

横尾本谷に架かる本谷橋は、20年ほど前、今の場所に吊り橋方式で架け替えられ、安心して渡れるようになりました。それまでは丸太を並べて架橋していましたが、大雨のたびに流され、何度も何度も架け替えてきました。大水が出たときに、流された登山者が何人もいました。また、本谷橋付近は雪崩の通り道となっており、毎年の架け替えと撤去作業を、我々が3日間ほどかけてやっています。

このように、4月の連休前から11月の下山までの間、我々小屋番は毎日のように、手作業で登山道の維持、補修に努めています。私も入・下山のとき、いつも気になる所を直しながら歩いています。何もしなければおよそ1時間半でヒュッテに着きますが、手直しに夢中になり、お腹が空いてフラフラになって登ったこともたびたびあります。このように、こまめに道直しをすることは、大変重要だと考えています。小屋番はその山に常時いるわけですから、この道のどこが歩きにくいとか、どこが滑りやすいとかを、完全に把握していなければなりません。

これを他人任せにせず、その場所に合った一番安全な方法を模索し、自分たちの手で行なうことが肝心です。しかも長期間耐えられる、センスのある道整備ができるよう、土方仕事に励んでいます。手作業には限度がありますが、これほど面白い仕事はありません。なにしろ、歩いている登山者にその場で感謝され、のちのちまで残る仕事なのですから……。

槍・穂高連峰も岩盤の弱体化が目立ち、多くの場所で浮き石や不安定な岩が見受けられます。これらを撤去できる時期は、夏山シーズン前の登山者の少ないころに限られており、すべてを片付けるのは不可能な状態です。登山はリスクを伴う世界ですが、我々としてはそういう不安要素をできるだけ取り除けるよう、努力したいと思っています。

登山者の皆さんには、自己責任を基本に、できるだけ自分自身でもリスク回避に努め、山の世界を存分に楽しんでいただけたら、と常々願っております。そして、登山道を歩きながら、一軒の山小屋や一本の道にも、このように様々なドラマが隠されていることを思い描いていただければ幸いです。

（㈱涸沢ヒュッテ代表取締役社長）

こまめに道直しに励むのが筆者の日課

REPORT

第4回全国「山の日」フォーラムに5000人
本会は「健康登山」「家族登山」をアピール

3月16(土)・17(日)の両日、東京・秋葉原のUDXで第4回全国「山の日」フォーラムが開かれ、およそ5000人が2階の展示・即売のフロアと4階のシンポジウム会場を訪れた。

日本山岳会は2階、正面奥に展示ブースを構えた。壁面に「健康登山」と「家族登山」のパネルを掲げ、イベントを通じて山と自然に親しむ人を増やすとともに、登山愛好者の全国組織、クラブとしてのJACの存在感をアピールするよう心掛けた。

「健康登山」ではYOUTH CLUBのメンバーが「体力チェック」を実施した。指導員が参加者に「安全登山は、自分の体力やバランスを保つ力を知ることから始まります」と話し掛け、片足で立てる時間を開眼、閉眼で計ったり、踏み台の上り下りを繰り返して、パルス・オキシメーターで運動と血液の酸素供給の関係を知ってもらったり……。熟年の方から家族連れまで、次々とテストに応じて楽しそうだった。

展示フロアでは、あちこちで本会会員の紺の法被(はっぴ)姿が目立ったが、家族登山普及委員会が発行した「親子登山ハンドブック」や「山の一番知ってますか?」などのQ&Aシリーズを配布した。

会場外での企画としては、あらかじめ設定した都内のスタート地点から秋葉原の会場を目指す《東京 登ろう 歩こうラリー》におよそ80人が参加した。2日間ともまずまずの天気に恵まれた。

秋葉原UDX2階の展示会場の様子

一方、シンポジウム会場は4階。テーマは「たくましい子どもたちの育成」「山の安全と防災」「地域振興」など。分かりやすい切り口で問題点を理解し、自然に親しむ機会の増進につなげようと企画された。2日間で7つのテーマを取り上げたが、そのうちの3つについて、YOUTH CLUB・和田さんの報告を読んでいただきたい。

楽しくて参考になる話ばかり
―シンポジウムに出席して―

和田 薫

2月の初めにスキーで足を骨折した。山に行けずストレスがたまっていたところ、中山副会長からお誘いをいただいた。座って山の話を聴くくらいならできるだろうと、ありがたく参加を決めた。「山の日」アンバサダーを務める花谷泰広さんと野口健さんの話がお目当て。

花谷さんの出番はシンポジウム2日目の第1テーマ《山と自然に親しむ私たちの生き方》で、100人以上が入れる部屋は満席だった。花谷さんはシトラスミントの香りがしそうなさわやかさで登壇、甲斐駒ヶ岳の魅力と七丈小屋の運営を始めた経緯を、写真を交えて気さくに話してくださった。

甲斐駒は標高差は厳しいけれど、体力に自信がない人も、少しずつ周りの山からステップアップしてぜひ山頂を目指してほしいとのこと。登山を始めたばかりの人も勇気付けてくれる楽しい講演だった。

野口健さんは、最近は子どもを対象に、登山だけでなく自然学校で生きる力を身に付ける事業に取り組んでいるとのこと。ユーモアを交えたお話に会場では何度も笑いが起こり、盛り上がっていた。

聴講者の半数以上は女性で、満席で入れなかった人も

講演する花谷泰広さん

千葉県の鋸南市をベースに猟師とガイドをしている黒澤徹氏の講演にも引き込まれた。増え続けるシカやイノシシを、私たちはどうしても「害獣」と呼んでしまうが、猟をする者にとっては「生き物の命をいただく、ということなのです」という言葉に考えさせられた。もっとお話を聞いてみたかった。

富山県警察山岳警備隊の松井貴充小隊長の講演も印象に残った。スイスとフランスの救助隊視察から帰国したばかりで、海外の救急システムを紹介してくださった。

海外の事例に学ぶことが多かったそうで、富山県警として「立山黒部の世界ブランド化」を推進するため、登山者の精神的なサポートをしたいと力強く締めくくった。登山者の一人として心動かされた。

＊

「家族登山」と「健康登山」をテーマに永田弘太郎委員が企画構成した本会のブースは、お陰さまで多くの方々から注目され、ビラ配りと併せ、その趣旨をアピールすることができた。

家族登山普及委員会とＹＯＵＴＨＣＬＵＢの皆さん、ほかにもデモテープ作りの大塚幸美さんらの力添えがなければ叶わなかった成果である。こうしたイベントを通じて、それぞれの委員会、会員が力を合わせることの大切さ、ありがたさ、嬉しさを感じている。

（「山の日」事業委員会　清登、成川、堀井、染谷）

ＪＡＣブースで、楽しそうに片足立ちを試みる親子

オープン・ステージでネパール支援の呼びかけも

松本市で「岳都・松本山岳フォーラム」が開催される

今年で第８回目を迎える「岳都・松本山岳フォーラム」が、全国「山の日」フォーラムと同じ３月16・17日にかけて松本市のまつもと市民芸術館で開催された。

例年同様、ステージ・プログラムは充実しており、猪熊隆之さん、中村浩志さん、なすびさん、大城和恵さん、鈴木とも子さん、工藤夕貴さんらが登壇。２日間で２５００人の来場者があった。

運営事務局から出演依頼を受けた萩原は、16日の座談会「元気です！　高校山岳部」の司会・進行を担当。松本県ヶ丘高校と大町岳陽高校の現役山岳部員６名に、それぞれの入部の動機や年間の活動内容と感想、そして、今後の目標などについて聞いた。両校とも、雪山訓練を含めた年間計画をしっかり立てて活動しており、高校生らしい元気な登山レポートを披露してくれた。

17日は工藤夕貴さんのトークショーに登壇。ＮＨＫＴＶ「実践！にっぽん百名山」のパートナーとして、一緒に歩いた山の写真を紹介しながら、工藤さんが感じた「山の声」について語っていただいた。

印象的だったのは、北岳の山頂でご来光に涙しながら強く思ったという「生きていることへの感謝の気持ち」。それは「山に親しむ機会を得て山の恩恵に感謝」という「山の日」の意義そのものだ、と言えるかもしれない。

「山の日」は暦の上だけでなく人の心の中にある、そんなことを実感させられたトークショーだった。

（「山の日」事業委員会　萩原浩司）

長野県内の２つの高校山岳部が活動状況を報告

REPORT

雪崩事故防止のための講演会・講習会を那須で開催

雪崩事故防止研究会　樋口和生

高校生を含む8人が犠牲になった那須雪崩事故から2年になるのを前に、栃木県の大田原市と那須町で雪崩事故を防ぐための講演会と講習会を開催した。

1991年に設立された雪崩事故防止研究会は、雪崩事故を少しでも減らしたいと考えている登山者、スキーヤー、山岳ガイドなどが集まり、互いに研鑽を重ね、雪山に携わる人たちに向けて、雪崩事故を未然に防ぐための雪や雪崩、医療的な知識、事故発生後の捜索技術などの普及・啓発活動を続けている。

なかでもここ4年ほどは、世界標準の雪崩捜索救助法（AvSAR：アブサー）の開発者であるマニュエル・ゲンシュワイン氏をスイスから招聘し、我々自身が最先端の知識と理論を学ぶとともに、ゲンシュワイン氏自らが講師となる講習会を開催してインストラクターの養成を行なうなど、活動の幅を広げている。

また、日本雪氷学会北海道支部の雪氷災害調査チームは、2007年の発足以来、雪崩事故発生現場の積雪調査を続けており、蓄積されたデータをホームページで公開するだけでなく、雪崩事故防止研究会の講演会や講習会に活用して、知識の普及に役立てている。

そんな最先端の知識や技術を少しでも多くの人に伝えたいという我々の思いと、ぜひ受講してみたいという地元の人たちの思いが重なって、今回の開催となった。

3月16日㈯、大田原市総合文化会館で講演会「雪崩から身を守るために」を開催した。

「雪崩の発生メカニズム」では、登山者にとって最大の脅威と言える面発生乾雪表層雪崩を中心とした発生メカニズムを、「降雪と気象」では、那須雪崩の一因となった低気圧接近時に見られる降雪結晶による弱層形成のメカニズムを解説。「雪崩のリスクマネージメント」と「積雪安定性評価」では、雪崩に遭わないための考え方を紹介した。「雪崩レスキュー」では雪崩に遭遇した際の捜索方法を紹介し、「雪崩医療」では雪崩事故に遭った際の医療的知識を解説した。

1日目に行なわれた講習会の模様

全国各地から参加した約80名の参加者からは、「系統立った知識を得ることができた」、「無知の怖さを知った」などの意見が寄せられるとともに、このような場を増やしてほしいという声も多かった。

講演会翌日の3月17日㈰、「雪崩サーチ＆レスキュー講習会basic」を休暇村那須と那須温泉ファミリースキー場で開催した。午前中の講義では、雪崩トランシーバー（ビーコン）の基礎、雪崩の死因、サーチ＆レスキューの基本、サーチスキル基礎、シャベリング基礎、複数埋没など、雪崩事故の際の救助と捜索の方法に特化した内容を解説し、その後の実技に備えた。

雪崩トランシーバーの受発信を確認するグループ・チェック

屋外で行なった実技では、まず初めに埋没者を掘り出す技術としてのシャベリングを行ない、効率的な掘り出し方を身に付けるとともに、埋没者を掘り出すのがいかに大変かということを体験した。その後、雪崩トランシーバーを使った捜索方法とプロービング、搬出方法の実技を行ない、最後にこの2日間で学んだ知識と技術を総動員して、雪崩事故現場を想定し

たシミュレーション・トレーニングを行なった。

18名の参加者からは、「これまで受けてきた講習会とは違ってより実践的だった」「チームで動くことの重要性と大変さが良く分かった」などの意見が聞かれた。

2日間の講演会と講習会を終えて思うことは、雪や雪崩のことをきちんと学び、正しい知識を持って山に入り、その知識を活かして山と対峙すれば、間違いなく事故は減らせるということだ。それでも避けられない事故に対しては、身に着けた装備と技術で迅速に対応して、犠牲者を1人でも減らす努力をする必要がある。

痛ましい事故の起きた現場を背景にして、真摯に、そして懸命に学んでいる受講者を見ていて改めてそう思った。

プロービング・トレーニング

雪崩事故防止研究会とは

1991年に設立された任意団体（代表：阿部幹雄）。

雪崩と雪の科学的知識や雪崩遭難者の捜索救助技術、低体温症などの知識の普及・啓発を行なっている。登山者、スキーヤー、スノーボーダー、警察や消防などの公的救助機関など、雪山に携わる人たちを対象に、講演会「雪崩から身を守るために」と講習会「雪崩事故防止セミナー」を設立以来、毎冬開催している。

編著書：『最新雪崩学入門』（1996年）、『決定版雪崩学』（2002年）、『雪崩教本』（共編著・2017年）〈いずれも山と溪谷社刊〉　ホームページ：http://www.assh1991.net/

雪氷災害調査チームとは

（公社）日本雪氷学会北海道支部に2007年に設立された調査チーム（代表：立本明広）。

豪雪災害や雪崩災害について調査を行ない、記録にとどめ、広く一般に情報を公開する社会貢献活動を実施。研究部門（20名）とガイド部門（22名）によって構成され、雪崩事故が発生するとガイド部門のメンバーが研究部門のメンバーをサポートする形で事故現場に入り、調査を行なう。編著書：『山岳雪崩大全』（2015年）『雪崩教本』（共編著・2017年）〈いずれも山と溪谷社刊〉　ホームページ：https://avalanche.seppyo.org/snow/

（雪崩事故防止研究会副代表／写真撮影＝阿部幹雄）

雪崩事故現場を想定したシミュレーション・トレーニング

HAKKODA RULE

八甲田山岳スキー安全対策協議会が発足
「八甲田ルール」を制定

八甲田山岳スキー安全対策協議会　菊池智明

バックカントリー（以下ＢＣ）なるワードが市民権を得るはるか以前より、八甲田山は「山遊び」＝「山スキー」が古くから文化として定着している場所で、八甲田スキー場は八甲田ロープウェーを拠点として上質なパウダーと樹氷観賞ができる山として親しまれてきた。ロープウェーを使って山岳へアプローチする、いわゆるＢＣ利用者も近年のブームに乗り、ここでも増加傾向にある。

これまで厳冬期の八甲田山における気象情報については、現地に常駐する山岳ガイドやパトロール隊が積雪の状態や降雪量などの情報を共有し、情報の発信もして安全なＢＣ利用に配慮してきた。今までの八甲田山系でのＢＣ利用者たちは、総じて技術的、精神的にも平均以上のレベルの人たちが多数派であった。山岳を利用するに当たっての自覚や行動計画も明確に認識されていたと思う。スキー場としては関与しない〝管理区域外〟に遊びの場を求め出掛けて行く、個々人の自由な行動を八甲田山は尊重しており、自己責任に任せ、敢えて干渉もしていなかった。

だが、近年は安易な気持ちでのＢＣ利用者が増加傾向にある。その背景にはスマートフォンなどの通信機器の発達やＧＰＳなどの位置情報機材の普及と、機器を携帯することによる根拠のない安心感、深雪性能に特化したファット・スキーやパウダー・ボードなどが市場に多数流通し、それを簡単に入手できることがある。その結果、一般ゲレンデ・レベルの人たちも簡単に、無責任にＢＣに踏み込んでしまう要因の一つとなっているのだろう、と我々は危機感を募らせていた。

ここ数年の安易な救助要請の傾向として、その認識不足が原因と思われる無責任な行為や、無計画な行動が遭難事故へとつながっている様子をたびたび目にしている。安易な行為で行動不能になり、安易に救助要請する。本人はそれらのルールを知らないことにより重大事故の当事者になるとは認知しておらず、のちにマスコミにより社会的制裁や大バッシングを受けるなどとは想像もしていないのだろう。そのような一部の人間の身勝手な行動により、ＢＣは〝悪〟であるという世の中の風潮は極力避けたいし、ましてやルールを守り楽しんでいる人たちにとっては大変迷惑な話である。

このような状況に鑑み、２０１８～19年シーズンから、八甲田山岳スキー安全対策協議会によって「八甲田ルール」が制定された。八甲田エリアのスキー場内・外における事故等を未然に防止することを目的としたもので、入山するすべての利用者が対象となる。

この「ルール」は、①管理区域、②管理区域外、③入山・登山届提出について、④遭難捜索・救助活動及び費用について、の４項目から成っている。詳細は八甲田ロープウェー㈱内の同協議会にアクセスされたい。

✉info@hakkoda-ropeway.jp

社会生活にルールがあるように山岳利用にもルールがある。入山するすべての利用者が注意すべきルールとしての情報を共有し、自らの行為と行動には責任が伴うことを理解してもらう必要がある。守るべきルールが存在することを再認識してもらうことで遭難や事故を未然に防止し、ルールを明確に告知することによって、個々人が守るべきこと、果たすべき責任について、一人一人がそのことに関心を持ってもらうことが、このルールを制定した目的であり、責任の所在を明らかにしたのが今回の「八甲田ルール」である。

「約束事・決まり事・守るべき事・注意すべき事」を八甲田山岳スキー安全対策協議会が告知することにより、山岳利用者がルールについて考える。その行動こそが注意喚起となり、責任認識となって、事故を未然に防ぐ予防措置へとつながるものと期待している。

八甲田のフィールドを楽しむ各自が「八甲田ルール」を自覚し、認識した行動をとることによって今後の山岳事故の減少へとつながる抑止力のような存在になれば、と願っている。

（八甲田山岳スキー安全対策協議会理事）

ADMISSION CHARGE

妙高山・火打山で入域料の社会実験を実施

新潟県妙高市環境生活課

【経緯】

国では2015年4月に入域料の枠組みを示す「地域自然資産法」を施行し、貴重な自然資源の保全と適切な利用を推進していくための、受益者負担の仕組みづくりを進めております。そのような流れのなか、環境省と妙高市の連携により、この法律の趣旨に基づいて、国立公園の優れた自然資源の継続的な保全・活用を図り、国内外からの利用者増に結び付けることを目的に、妙高山・火打山の登山客に任意の協力金等を求める社会実験を実施しました。

【妙高市で実施された理由】

①妙高山・火打山への登山口は主に3ヶ所と限定され、いずれも妙高市の区域内となっている。山岳エリアにおける入域料の導入において、利用者の入り口が限定されていることは立地・利用条件としても有利であること。

②妙高ビジョンの策定、新国立公園誕生後の環境会議の創設やDMO：妙高ツーリズムマネジメントの発足、さらにはクラウド・ファンディングを活用した環境保全への積極的な取り組みなど、妙高市のこれまでの取り組みが評価されたこと。

【実験概要】

＊実施期間は2018年10月1日(月)～21日(日)までの21日間。

＊実施場所は①笹ヶ峰登山口（火打山登山ゲート）、②新赤倉登山口（スカイケーブル上）、③燕温泉登山口（湯道・新道分岐地点）の3ヶ所。

＊受付時間は火打山登山口、燕温泉登山口が午前5時～午後5時で、新赤倉登山道はスカイケーブルの運行時間に合わせ午前8時～午後4時。

＊協力金の金額について「国立公園に関する世論調査」では、国立公園への入園料に関する設問（全国3000人を対象とした訪問調査）の結果では、500円までを選択した割合が最も多かったことから、500円とすることとし、協力者にはライチョウが刻印された木製ストラップを記念品として贈呈しました。

＊協力金制度に対する登山者の意識や環境保全への要望等を把握して客観的な分析を行なうため、下山された方にアンケート調査を実施しました。

＊今回の社会実験から得られた結果を検証するため、環境省、林野庁、新潟県、学識経験者、新潟県生態研究会、妙高ツーリズムマネジメント、妙高市（環境生活課、観光商工課）、計11名の検討委員から成る「妙高山・火打山入域料検討会議」を設置しました。

【実験結果】

①自然環境保全協力金について＝各登山口に係員を配置し、自然環境保全に関わる協力金（500円）の寄付を依頼（一部、募金箱の配置のみ）。協力者数：2963人（登山者以外の協力者も含む）／金額：146万277円（500円以外の金額も受付）／協力率：85・6％（登山者数：3459人、協力者数：2963人）

②アンケート調査について＝下山された方に、自然環境や登山道に関するアンケート調査を実施。対象者数：2837人／有効回収数：1486人（現地回収：1149人、後日回収：337人）／有効回収率：52・4％

【協力金の活用方法】

①火打山ライチョウ生息環境保全事業、②妙高山麓登山道整備事業

【今後について】

①法定協議会に準ずる検討組織の立ち上げ、②2019年度も環境省と連携し、社会実験を実施予定。期間：2019年7月1日(月)～10月31日(木)〈123日間〉実験内容：協力金の収受、アンケート調査。

詳細は今後、検討組織で決定。

妙高山・燕温泉登山口で協力金を受け取る

NEWS

中ア南部・念丈岳～南越百山間の登山道を再整備

中央アルプス南部岳人ネットワーク

中央アルプスは、木曾駒ヶ岳・空木岳・南駒ヶ岳・越百山と続く主脈縦走路が、人気コースとなっている。東側には天竜川越しに南アルプスがそびえ、２つのアルプスに挟まれた地域を「伊那谷」と呼ぶ。アルプスから陽が出てアルプスに陽が沈むのは、全国でもこの地域のみである。

下伊那郡松川町出身の本多勝一氏の著書『愉しかりし山』には、越百山周辺から伊那谷側への登山道は、急峻な中小川ルートなど数本があったことが記されている。しかし、登山者の減少とともにクマザサやスズタケに覆われたり崩落により、平成の中ごろには伊那谷側へのルートは皆無となり、越百山への登山道の再開が地元岳人の悲願となっていた。

再整備された登山道。南越百山～奥念丈岳間にて

平成28年7月「松川町ふるさと山の会」主催による、町民対象の第1回烏帽子岳登山が開催された。また、同年11月には松川町と飯島町の役場職員と岳人有志が、長さ1・6m、約20kgの柱を背負い上げ、烏帽子岳山頂の標柱の立て替えと標識の更新を行なった。

こうした活動のなか、念丈岳～南越百山間の登山道の再整備の機運が高まり、平成29年7月、登山道の再整備を活動の目的とした「中央アルプス南部岳人ネットワーク」（福沢勝好会長）が発足した。地元を中心に四十数名もの、予想外に多くの岳人の賛同をいただき、3年計画で約3・7kmの再整備を行なう計画となった。

このプロジェクトは行政との連携・支援が不可欠で、県や国などへの申請手続きは飯島町役場で、また、松川町役場では長野県地域発元気づくり支援金事業を活用して、クマザサを刈る最新鋭の草刈り機（ビーバー）などの貸与をいただいた。

1年目の平成29年は、念丈岳～奥念丈岳間約1・4kmを2泊3日で、平成30年には、奥念丈岳～南越百山間約2・3kmを3泊4日にて、いずれも海の日の連休前後に実施した。日帰りのボッカ隊を含め延べ100人近い会員の献身的な活動により、予定より1年早く開通することができた。

踏み跡を捜しながら足場の悪い急斜面に立ち、硬いクマザサを刈り取る作業は困難を極め、ビーバーの故障により再度担ぎ上げる事態も発生した。また、暑さ対策と水の確保、そして、ブヨなどの虫にも悪戦苦闘、正に臥薪嘗胆の熱意が成し得た業だと思う。

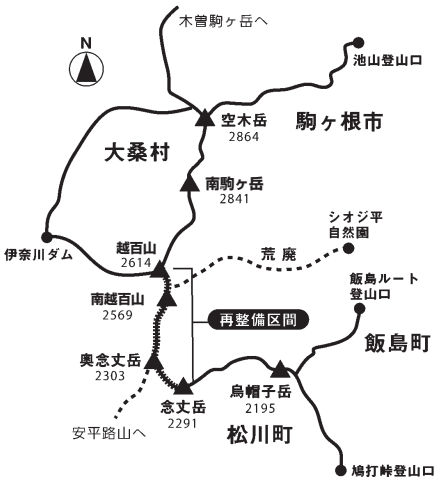
活動の状況は、地元の新聞をはじめ山岳雑誌『山と渓谷』や『岳人』にも大きく取り上げられ、想定外の反響をいただいた。

今回の整備により、空木岳以南では唯一の伊那側からのルートが開通したことになり、登山者の利便性の向上に加えて、エスケープ・ルートとしても利用でき、安全性の確保を図ることができた。

このルートの保全のためには歩いていただくことが何よりも肝要で、念丈岳と奥念丈岳の鞍部の与田切乗越付近には水場があるので、縦走路として活用していただければ幸いである。

なお、中央アルプスは、県立自然公園から国定公園に移行される予定である。

（中央アルプス南部岳人ネットワーク事務局　北原正尚）



追悼
OBITUARY

西村政晃君を偲ぶ

吉永英明

本会評議員・元副会長の西村政晃君が、2月28日逝去された。

私は、3月5日から千葉支部の行事でネパールのトレッキングに責任者として参加する予定であったため、通夜・葬儀に参列できないと思い、ご遺体がご自宅に安置されているときにお別れをしたいと、ご自宅に伺った。普段と変わりのない、今にも目を覚ますのでは、といった穏やかな姿であった。

2月1日、山岳部OB会の新年会で会ったのが最後であったが、そのおりにも具合の悪そうな様子は全く見られず、普段どおりの姿であった。余りにも急なことで、当初は本当に信じられなかった。何か、人間の生と死に対する運命論者になってしまったような気がするこのごろである。

西村君とは学部は違っていたが、千葉大学山岳部、昭和35年入部の同期である。1ヶ月に及ぶ新人の夏山に彼はいなかったので、入部したのは夏山後の秋口のころと思う。学部の寮の同僚の誘いが動機であったらしいが、高校でも山岳部に籍を置いたことがあるらしく、山岳部にあこがれていたようである。

山陰は伯耆大山の麓の出身で、こんもりとしたボサボサの髪型の、いかにも〝大山の山猿〟といった風情であった。同期は9人。上級生が少なかったせいもあり、中途退部はなく、結束は固かった。2年生の夏には、上級生の新人に対する温情的な扱いに反発、満足できず、2年生全員で夏山を終えたその足で、高山から鳥取県岸本町の彼の家に押しかけたことがあった。大山登山を楽しみ、帰路は岡山に出て、鈍行で帰京した。20歳の我々には大旅行であった。

彼は昭和39年3月に園芸学部を卒業した後、社会科学に興味を持ったのか、文理学部の経済専攻に学士入学した。この間には、山岳部内のゴタゴタを収拾すべく、OBでありながら一時的に主将となり、見事、山岳部を再建に導いている。

昭和41年3月、経済学を修めて卒業し、㈱中村屋へ入社。社業に専念する一方、昭和46年には、沼田真教授の指導による第3回の海外遠征で、ネパール・ヒマラヤのマカルーⅡ峰に挑むことになり、彼はマネージャーとして先発。どこで勉強したのか、私がカトマンズに到着したときには、達者な英会話をこなしていた。

このときは仲間を高所障害で失ってしまったため、失敗という結果に終わったが、彼はマカルー・ベースから長駆コダリ・ロードに至る1ヶ月間の東ネパール横断の旅をしている。その間、彼の調査目的であるネパール菓子について調べ上げ、帰国後、「ネパールの在来菓子」というユニークな調査報告を発表している。

その後、日本山岳会に出入りするようになり、持ち前の勤勉さから先輩諸氏に重宝がられ、理事、評議員を歴任、平成24年には副会長に就任し、2年間の任期を全うした。特に財務・総務畑に詳しく、JACに対する貢献は大きいものがあった。高齢化と会員減に悩み、内向きの活動が多い昨今のJACの現状を憂え、将来の登山界を引っ張っていく立場を維持できるだろうか、と心配していた。

山岳部の同期9人のうち、すでに4人が鬼籍に入った。なんとも悲しく、寂しい限りである。

西村政晃（にしむら・まさあき）
会員番号7468

1941年　鳥取県西伯郡岸本町（現・伯耆町）生まれ
1960年　千葉大学園芸学部入学・山岳部に入部
1964年　同大園芸学部卒業・同大文理学部学士入学
1966年　同大文理学部卒業・㈱中村屋入社
1971年　千葉大学東ネパール学術調査登山隊に参加
1972年　日本山岳会入会
1981～2019年　理事・評議員・副会長などを歴任

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

科学委員会

秩父宮記念山岳賞の小疇氏が講演　科学委員会のフォーラム開催

科学委員会主催のフォーラム「登山を楽しくする科学（XI）」が、3月16日に、東京都港区西新橋の東京慈恵会医科大学の西新橋キャンパス1号館で開催され、山岳会員、一般の方など100人近い聴衆が、3つのテーマ、3人の講師の話に聴き入った。

トップバッターは、今年度の日本山岳会秩父宮記念山岳賞を受賞した小疇尚（あぜたかし）・明治大学名誉教授。受賞の対象になった「日本の山岳景観」論を取り上げ、「その魅力と見どころ」について語った。世界の高山に比べ、日本の山岳は低くて小柄だが、岩がもろく降水量が多いため、地形が複雑に入り組んでおり、繊細で多様性に富む日本の山岳景観は世界的にも貴重だという。

世界や日本の山岳をくまなく歩き、氷河研究で知られるだけに、日本各地で今も見られる独特の氷河地形の特徴を示してくれた。今でこそ日本に氷河があったし、現在もあることは常識となっているが、20世紀初頭には理解されず、大きな論争になったという。今でもモレーン（氷河が運んだ岩石などの堆積物）の存在をめぐって学問論議があるなど、学者の間での興味深いエピソードも聞かせてくれた。

2番手は、新潟大学災害・復興科学研究所の西井稜子助教授が登壇、「雨による山崩れの特徴―登山で気を付けること―」と題して、災害列島日本の現実を語ってくれた。プレートの沈み込み帯に位置する日本は、隆起や火山活動で山が形成され、地震や大量の降水で激しく削られる環境にあるとし、繰り返される土砂移動現象が、人の生活に被害をもたらすときに、その現象は災害となるという。

講演する小疇尚・明治大学名誉教授

国内の土砂災害発生件数は、年間約1000件にもなる。原因は地形、地質、植生などの土地の脆弱性に豪雨や地震が引き金になって起こる。現象として、表層崩壊、深層崩壊、地滑り、土石流の違いを迫力ある動画で解説してくれた。災害発生の前には、亀裂や落石、異様な土の臭いなどの前兆現象があると注意を喚起、異変を感じたらすぐに離れること、とアドバイスしてくれた。

最後は、日本高山植物保護協会理事で、三ツ峠山荘を経営する中

村光吉氏が「アツモリソウとラン科植物の美しさと生態」の題で講演した。野生のランは馴染みが薄く、知る機会も少ない。しかし、その起源は、７６００～８４００万年前に遡る。世界に約２万５０００種、日本には２３０種ほどがあるという。

生態も独特で、受粉は昆虫に頼るが、対応する昆虫も決まっており、虫に合わせて花も形態を変化させてきた。特異な花の形で知られるアツモリソウの昆虫は、マルハナバチだ。虫の特性に合わせて、花の形も進化、確実に受粉できる仕組みを作っている。

ランの種子は胚乳がなく自力では発芽できない。菌を養分にして芽を出し、子孫を残す驚きの仕組みを持っている。菌も種類ごとに違い、アツモリソウはツナスネラという菌だという。樹上に生える着生ラン、土中の菌から栄養を取る腐生ランと形態も様々だ。

最大の悩みは盗掘と言う。三ツ峠では、柵で生息地を囲って保護活動を続けている。科学委員会の探索山行は、６月に現地を訪れる予定だ。

（米倉久邦）

図書紹介

ドニー・アイカー著／安原和見訳
死に山―世界一不気味な遭難事故、ディアトロフ峠事件の真相―

2018年8月
河出書房新社
四六判　352ページ
2350円＋税

この本に書かれた山岳遭難事件は、ユーラシア大陸の中央に東洋と西洋を分けるウラル山脈（最高峰ナロードナヤ・１８９５ｍ）があるが、この山脈の中央部にあるオトルテン山（１１８２ｍ）の中腹部、１０７９ｍの雪原の野営地で起こった。パミールや天山の７０００ｍ峰の難壁を登る、ロシアの登山家が登る山岳地帯ではない。

しかし北緯62度に位置する遭難現場は極寒の地、ハカ共和国の首都ヤクーツクとほぼ同じ緯度に位置しているのである。遭難現場も冬季にはマイナス32℃以下までに下がる。ここで１９５９年２月末、トレッキング隊の隊員９名が１人または２人、３人一諸になど、バラバラに分かれて死んでいるのを、事件後捜索隊が見付けた。防寒具を身に付けていない者、裸足の者、舌をかみ切っている者、頭蓋骨骨折の者など様々である。

このトレッキング隊は、スベルドロフスクの名門大学、ウラル工科大学の学生とＯＢが中心で構成されていた。女性隊員のリュウダなどは、同校卒業の元ロシア大統領のエリツィン大統領と学部（建築学）まで同じである。隊員のほとんどが１９３７年前後の生まれなので、生きておれば現在80歳前後である。

スベルドロフスクは大工業都市で、遭難場所から直線距離で５４

０km南のウラル山脈東麓にある。旧ロシア時代にはエカチェリンブルグと呼ばれた。ピョートル大帝の妻のエカチェリーナから名付けられたのである。ソ連時代は革命家スベルドロフの名を取って命名され、ソ連崩壊後再び元の名に戻った。この町はロシア革命時に皇帝ニコライ２世一家全員の殺害があったという因縁の町でもある。

また、２０１３年にはこの都市の南２００kmのウラル山脈で隕石の大爆発があった。古くはシベリアのど真ん中のツングースカで、いまだ原因不明の針葉樹８０００万本がなぎ倒される大爆発があった。そのほか、シベリアでは奇怪な大事件が起きている。

今回のウラルでの遭難事故は、トレッキング隊の隊長の名を取り、ディアトロフ峠事件と呼ばれ、何度もの原因究明にもかかわらず、「未知の不可抗力」によると結論付けられた。

その結論から50年も経過しているにもかかわらず、疑問を感じていたアメリカ人の著者ドニー・アイカーさんは２０１０年と12年、調査に乗り出す。著者は登山家でもなく、ロシア語も話せないのに、多分強烈な好奇心に駆られて現場を訪れ、調査を始める。一時この現場は入山禁止のときもあったのにビザが出たこと、関係ロシア人たちが著者の調査に全面的に温かい協力をしてくれたことは不思議でもあるし、ありがたいことだと思う。

本書を読んでいるうちに自分でもこの疑問を解いてやろうと、巻を措く能わず、最後まで読んでしまった。著者はこの難問を解決するのに消去法を取り、雪崩、強風、兵器の実験、機密扱いになっている、など７項目を立て、問題解決に挑むのだが解決に至らなかった。だが、ふとした機会から「アメリカ海洋大気庁」のコロラド州ボルダー支部の科学者が、この問題を解決してくれそうなことが分かり、彼の下に駆け付けたのであった。結論はこの本を読んでもらうことにしたい。

（田村俊介）

日本・エクアドル外交関係樹立 100周年記念友好登山隊隊員募集

日本とエクアドルは2018（平成30）年に外交関係樹立100周年を迎えました。さらなる親睦と友好推進のため、日本山岳会創立120周年国際交流事業第１弾として、赤道直下、地球の中心から最も離れた山チンボラソで、エクアドルとの交流登山を実施します。

１．事業内容
１．2019年９月　エクアドル最高峰チンボラソ（6310m）の交流登山
２．2020年９月　日本最高峰富士山（3776m）の交流登山

２．交流人員　日本山岳会およびエクアドル山岳会　各々15～20名

３．2019年エクアドル訪問日程
９月１日（日）成田発　14:25（アエロメヒコ航空57便）
９月４日（水）～８日（日）チンボラソ登山・トレッキング
９月14日（土）成田着06:20（アエロメヒコ航空58便）

４．参加資格
１．10年以上の登山経験を有している70歳以下の会員
２．ピッケル・アイゼンを使用した、残雪期登山の経験が最近３年以上あること
３．5000m以上の高所において、１日で標高差1300mを往復する体力があること
４．７～８月の富士山トレーニング（２～３回）に参加できること

５．参加費用　１人40万円前後

６．参加申込み締切り日　５月31日（金）

７．参加受付および詳細問合せ先
栃木支部長　渡邉雄二　Mail:ywata11@ybb.ne.jp　Phone:090-1033-9954

会務報告

平成30年度第10回（3月度）理事会議事録

日時　平成31年3月13日㈬19時00分～20時47分
場所　集会室
【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・谷内各常務理事、安井・清登・齋藤・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事
【欠席者】星理事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・平成31年度事業計画について
平成31年度事業計画について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

2・平成31年度予算について
平成31年度予算について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

3・中村屋サロン美術館「富士山―芸術の源泉―展」への協力について
中村屋サロン美術館「富士山―芸術の源泉―展」への当会の名義後援による協力について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

4・国際交流登山の実施について
日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念友好合同登山の実施について審議した。（賛成13名、反対なしで承認）

5・中村保著『空撮ヒマラヤ越え山座同定』出版協力金について
中村保著『空撮ヒマラヤ越え 山座同定』出版に際して協力金を支出することについて審議し、30万円を支出することとした。（賛成13名、反対なしで承認）

【協議事項】

1・平成31年度委員会等の予算査定について（古川）
平成31年度委員会等の予算査定

について協議した。

2・「赤石山荘」避難小屋化の署名活動について（重廣・野澤）

四国・東赤石山の「赤石山荘」避難小屋化の署名活動について協議した。

【報告事項】

1・入会希望者11名、準会員入会希望者12名、準会員から正会員への移行入会者8名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2・記念事業委員会「エベレスト登頂50周年」記念行事の検討状況について報告があった。（重廣）

3・支部事業委員会「第8回登山教室指導者養成講習会」開催状況について報告があった。（重廣）

4・山岳研究所運営委員会の活動状況について報告があった。（安井）

5・登山計画書の提出状況について報告があった。（中山）

6・「沢登り同好会Ⅱ」設立の承認を行なったとの報告があった。（永田）

7・当会所有の『シュラーギントワイト・アトラス』図版をデジタルデータ化し、HPへ掲載することについて報告があった。（永田）

8・山形県山岳情報ポータルサイトへの『山のマナーノート』の引用について報告があった。（齋藤）

9・「山」3月号の発行について報告があった。（神長）

【連絡事項】

1・谷川岳危険地区の登山禁止について（谷内）

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会

・平成31年度4月度常務理事会
4月2日㈫　18時30分～

・平成31年度4月度理事会　4月10日㈬　19時00分～

2・評議員懇談会

・平成31年4月11日㈭　19時00分～　104号室

3・平成31年度通常総会

・平成31年6月22日㈯　14時00分～　東京都千代田区　主婦会館プラザエフ

4・第7回小島烏水祭

・平成31年4月6日㈯　12時00分～16時00分　香川県高松市

ルーム日誌 3月

1日　「山の日」事業委員会
4日　総務委員会　記念事業委員会
5日　常務理事会　スケッチクラブ
6日　図書委員会　山行委員会　バックカントリークラブ
7日　科学委員会　YOUTH CLUB
8日　YOUTH CLUB
11日　自然保護委員会　財務委員会　スキークラブ
12日　山岳研究所運営委員会　「山の日」事業委員会　スケッチクラブ
13日　理事会　休山会　山想倶楽部
14日　支部事業委員会　山岳地理クラブ　九五会
15日　山の自然学研究会　みちのり山の会
18日　総務委員会　資料映像委員会
19日　YOUTH CLUB　スキークラブ
20日　YOUTH CLUB　フォトクラブ　三水会　つくも会
22日　会報編集委員会
26日　デジタルメディア委員会　平日クラブ
27日　家族登山普及委員会　麗山会
28日　公益法人運営委員会　学生部　山遊会

3月来室者　446名

会員異動

物故

田辺昭雄（5249）19・2・21
篠塚正俊（95775）19・3・17
多田　稔（139559）19・2・24

退会

斎藤　実（4545）山梨
井出秀雄（7159）越後
小比類巻尚美（7168）千葉
田中重義（7561）関西
吉井洋之（7994）
酒井春一（8159）越後
野沢　豊（8168）東京多摩
仁王一成（9112）静岡
川口和男（9260）東京多摩
臼田徳雄（9267）栃木
荒木康雄（9304）
川端浩文（9328）熊本
木村博司（9423）
川合愛子（10037）
亜厂文代（10869）東京多摩
尾身　茂（10889）

中村靖弘（10909）栃木
松村　守（10938）越後
中澤喜久郎（10986）
久保義明（11779）関西
久保　優（11780）関西
牧野忠男（11854）
鶴田　實（11962）
門倉昭夫（12313）
井口　功（12327）山梨
渡邉正子（12382）東京多摩
櫻井清隆（12431）石川
藤井公博（12441）岩手
増田幸雄（12520）
佐藤隆子（12703）
宮崎　孝（12711）埼玉
前田健進（12959）石川

伴　栄子（13047）熊本
高田容子（13350）
岡田育子（13545）岐阜
山本一夫（13887）関西
高倉　敦（13913）岐阜
梅津誠一（14167）山形
中川美子（14341）東海
古市伊都姫（14353）広島
畠中智代（14384）静岡
臼井恵之輔（14648）
延末義明（14739）広島
木原　充（14875）北九州
池田智彦（14876）北九州
山口順子（14902）東海
高橋洋二（14975）秋田
河原順子（15058）広島

第21回「秩父宮記念山岳賞」の推薦募集について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第21回「秩父宮記念山岳賞」の推薦（他薦に限る）を次のとおり受け付けます。事務局まで資料をご請求ください。当会のホームページを活用される方は、推薦募集の詳細を掲載しておりますので、推薦要項・所定様式（ダウンロード可能）などをご参照ください。多数のご推薦をお待ちしております。

なお、本賞は公益目的事業でありますから、受賞対象者を本会会員またはグループに限定しておりません。

◎対象分野　登山活動／山岳に関する文化的活動、学術的業績
◎提出先　日本山岳会内　秩父宮記念山岳賞事務局
◎締切り　令和元年８月31日（土）

川北一博（15062）東海
田中政子（15071）東海
清水康範（15142）山陰
佐々木芳行（15555）東京多摩
高垣隆光（15559）広島
寺井素子（15600）神奈川
小島　環（15697）
谷口　一（15789）
菊池佳子（15820）
岡島慎治（15915）東海
渡辺　昭（16039）神奈川
広瀬　宏（16058）山梨
沼野雅人（16418）熊本
稲田久志（A0047）北九州
高山修一（A0094）
横田祐樹（A0103）関西
清原保子（A0136）広島
天野千穂（A0140）広島

渡辺理雄（A0187）岩手
退会（19・4・1正会員に移行）
加藤大雄（A0011）東京多摩
加藤真美（A0012）東京多摩
葉上徹郎（A0013）神奈川
青木義仁（A0044）東京多摩
渡辺　誠（A0065）東京多摩
中川　紋（A0074）
神谷悦之（A0099）
松島　彩（A0126）

2018年9月26日付けで退会届が出された横尾健二（14673）様（「山」2018年10月号〈No.881〉18ページ会員異動・退会欄に掲載）につきましては、本人より撤回の申し出があり、これを認めることとしました（今後は無所属）。

（総務担当理事・永田弘太郎）

INFORMATION インフォメーション

◆「アツモリソウ保護活動の現場と富士山北麓（紅葉台）を訪ねる」探索山行のお誘い

科学委員会

アツモリソウなど、希少植物保護活動の実際・体験と、富士山北麓で富士山火山活動の記録を訪ねます。三ツ峠山（15日）と紅葉台

（16日）へハイキングをします。下山時入浴の予定です。
日程　（予定）　6月15日㈯　新宿駅西口集合7：30―（バス）―三ツ峠登山口―（ハイキング）―三ツ峠山（三ツ峠山荘泊）　6月16日㈰　三ツ峠山荘―（徒歩下山）―登山口―（バス）―紅葉台下―（ハイキング）―紅葉台―（バス）―温泉入浴―（バス）―新宿駅18時頃解散
参加費（予定）　2万円（バス、宿泊ほか）
募集人数　45名（先着順）　詳細は後日連絡いたします。
申込み　氏名（会員番号）、性別、年齢、住所、電話番号（携帯が望ましい）を記載して、✉kagaku@jac.or.jp　担当下田俊幸宛にお願いします。

◆登山リーダーのための救急救助講習会

山行委員会／遭難対策委員会

登山リーダーが習得しておくべき「救急救助」に関する知識・スキルなどについて、実技を中心に学びます。会員はもとより、会員外の方々の参加も歓迎します。
日時　6月16日㈰10～17時
場所　JICA地球ひろば（JR市ヶ谷駅より徒歩10分）
講師　恵秀彦会員（遭難対策委員会）
定員　30名
費用　500円（当日集金）
申込み先　山行委員会　長島泰博
TEL 090-5554-8345　✉sanko@jac.or.jp
＊参加者に詳細を案内します。

◆秋田駒ヶ岳、太平山

山行委員会

秘湯・乳頭温泉「鶴の湯」に宿泊、豊富な高山植物で有名な秋田駒ヶ岳を歩きます。眼下に日本海を一望する太平山山頂小屋で、秋田支部の皆様と交流を深めたいと思います。
日程　7月13日㈯～15日（祝）　2泊3日
集合　JR秋田駒　午前11時30分
解散　JR田沢湖駅　午後4時30分
行程　13日　太平山旭又登山口～太平山山頂小屋（泊）
14日　太平山～旭又登山口＝仁別温泉＝秋田駒ヶ岳＝田沢湖駅＝鶴の湯
15日　鶴の湯＝秋田駒ヶ岳八合目より周遊登山
歩程　各日とも4～5時間
費用　3万円（宿泊費、チャーター車両経費、懇親会、傷害保険料など）
申込み　定員13名になり次第締切り（最終締切り日6月10日）。会員番号、住所、氏名、生年月日、携帯電話明記のこと　担当：植木淑美
FAX 042-734-1498
✉sanko@jac.or.jp
＊詳細はHPに掲載。参加者に詳細案内をお届けします。

◆新入会員のための企画

「徳本峠越えとウェストン祭」

山研委員会

ウォルター・ウェストンの足跡をたどり、新緑の島々谷から残雪の徳本峠を越えて上高地入りします。上高地では山研に1泊して、翌日「碑前祭」に参加。新会員の仲間づくりを手助けする企画です。
日程　6月1日㈯～2日㈰
費用　1万2000円（1泊2食、午餐会会費、記念品代、傷害保険料）
定員　20名（29年度入会の会員および本会会員の希望者）
申込み　5月11日㈯までに　柴山信夫まで。
TEL 090-8331-4212
✉jac-sanken@jac.or.jp
＊現地集合・解散
＊申込み者に詳細案内を送ります。

＊

山研FAX番号変更のお知らせ

経費削減の一環として、現在FAXで使用している番号を5月末で廃止し、6月1日より電話番号と共用にいたします。ご迷惑をお掛けしますが、登録の変更をお願いいたします。
TEL・FAX共通0263-95-2533

◆第73回ウェストン祭のご案内

信濃支部ウェストン祭実行委員会

本年も恒例のウェストン祭（碑前祭）を6月2日（第1日曜）に開催します。ウェストン広場にて午前10時から。記念講演は、日本山岳会医療委員会委員長・野口いづみ氏（奥多摩支部支部長）。前日1日㈯は恒例の徳本峠記念山行を行ないます。島々宿出発6時、記念山行は自己責任が基本です。多く

のご参加をお待ちしております。
問合せ　青木保良 TEL 090-1545-3343

◆ジョージアとコーカサスの旅参加者募集　グローバルクラブ

JACグローバルクラブは、日本山岳会の同好会です。私たちはコーカサス山脈の南側にある小国ジョージア（グルジア）の旅を企画しました。山の自然と文化にご興味のある方、参加されませんか。7月15日から25日まで10日間の旅で、カズベギ峠の見える山麓まで行き、世界遺産のウシュグリ村を訪問し、シハラ峰、ウシュバ峰を望みます。ご応募の締切りは5月14日です。ご興味のある方は、左記へご連絡ください。

旅行手配ユーラスツアーズ坂田は、JACグローバルクラブ吉川正幸✉markintokyo80@gmail.com TEL 03-6453-6632、また

◆山岳写真展「心に映る山々」アルパインフォトクラブ

国内外で撮影の2018年作品39点を各地で巡回展示します。ぜひお立ち寄りください。

巡回　伯耆の国展
会期　4月13日(土)～5月19日(日)〈会期中〉
会場　伯耆国山岳美術館　鳥取県西伯郡伯耆町金屋谷
TEL 0859-63-0396

巡回　酒田展
会期　6月19日(水)～25日(火)
会場　酒田市総合文化センター
TEL 0234-24-2991

巡回　長野展
会期　9月2(月)～28日(土)（日曜休館）
会場　長野市大門柏与文具2F「柏与フォトサロン大門」
TEL 026-232-7609

巡回　東京・高尾山展
会期　10月12日(土)～14日(月)（最終日延長未定）
会場　東京都「TAKAO599 MUSEUM」
TEL 042-665-6688

なお、第27回（2019）山岳写真展を左記のとおり開催します。
会期　10月31日(木)～11月6日(水)（10時・土日祝11時～18時、最終日15時まで）
会場　東京四ツ谷日本写真会館「ポートレートギャラリー」
問合せ　川嶋新太郎 TEL 090-9369-2345

◆第6回上州武尊山スカイビュートレイル開催に伴うご注意

同実行委員会

本年も川場村、みなかみ町、片品村の3町村合同で、武尊山周辺での山岳マラソンを開催します。競技は9月21日(土)～23日(月)に行なわれますが、川場村・高手山～剣ヶ峰山周辺、みなかみ町・武尊神社周辺～武尊神社登山道～武尊山（沖武尊）～セビオス岳～ほたか牧場、および川場村・雨乞山登山道～雨乞山周辺で混雑が予想されます。当該地域を登山の際にはご注意とご配慮のほど、よろしくお願いいたします。

＊詳細については大会HPをご覧ください。
https://skyviewtrail.com/free/notice

◆創立83周年 日本山岳画協会展

期間　6月30日(日)～7月6日(土)　11時～18時（30日は12時～、6日は17時まで）
会場　東京交通会館B1ゴールドサロン　〒100-0006東京都千代田区有楽町2-10-1
TEL 03-3215-7933

❖編集後記❖

●3月下旬は北八ヶ岳の黒百合ヒュッテに2泊、天狗岳に遊びに行ったほか、山小屋ライフを満喫してきました。久し振りの雪山でしたが、マイナス10℃を下回る寒さに、身が引き締まる思いでした。北八ヶ岳は格好の冬山入門コースだけに、ピカピカのウェアに身を包んだ登山者でいっぱいでした。

●ところが、いざピッケル、アイゼンを使って歩き出すと、実に危なっかしい人が目立ちました。案の定、天狗岳の下りで滑落事故が発生、ヘリで降ろされました。やはり系統立った、実践的訓練を受けていない弱さだと思います。学びの場を求めている登山者は多いので、公益法人としてのJACの存在意義が一層高まっているのではないでしょうか。（節田重節）

日本山岳会会報　山　887号
2019年（平成31年）4月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　小林政志
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社